

美術科の学習意識に関する中学生のアンケート例について

齋藤 千香子*・種倉 紀昭**

(2003年3月20日受理)

Chikako SAITO and Noriaki TANEKURA

On a Sample of Inquiry in References to the Consciousness to Art Study of
Pupils of the Junior High School

はじめに

美術教科の学習意義について、齋藤は北上市立北上中学校生徒183名を対象に昨年1月に29項目の質問よりなる意識アンケートを実施した。また、種倉は本論の考察の参考対象とするために、ほぼ同じ内容の無記名アンケートを本年1月に岩手大学教育学部の造形文化課程美術コース造形の1学年を主とする23名の学生を対象に実施した。

本論は、この中学生の意識アンケートの回答結果の集計から数値的に、また論述例から中学生の美術の学習に対する意識がどのような傾向にあるかを分析し考察する。加えて、中学生の美術の学習意識の中に現代的な傾向や特徴(流行)を見だし得るのか、あるいは美術教育の不変(不易)の態度が見られるのかにも、関心がある。設問が単純なものでないことに気付き、答える自分を客観的に分析している生徒も多い。生徒に対する美術教員の支援の態度や教授法がどのような生徒観に基づき行なわれるべきかを考察し論じたい。

1. 美術教科の学習意義について

(1) 中学生の意識アンケートの意味について

美術教科の学習意義についての中学生の今回の意識アンケートで、教師が回答者であればどのように答えるであろうか、模範的な回答があり得るとしても、美的能力の発達段階によって、あるいは美術教育の理論や実践の蓄積の違いによって回答内容は微妙に異なるのであろう。それらの問題は後で論ずることにする。このアンケートは可能であれば、今後、他の学校でも継続して行なう必要がある。質問内容は、齋藤と種倉が概略を検討し、齋藤が決定し、中学校で実施し、集計し、コメントを記述した。大学生1年生にはほぼ同じアンケートを種倉が実施し集計した。

本論では実際の質問項目を変え、発問解説をa, b, c……で示し、更に分類が必要な場合には、発問解説をイ, ロ, ハで示した。以下に質問内容を箇条書で分類し略記する。アンケート回答は大半

*北上市立北上中学校

**岩手大学教育学部

が諾否の二者択一で、各質問に「はい」か「いいえ」のどちらかで一つずつ回答するようにした。末尾に記述で回答を求める幾つかの発問がある。

- a. 「美術の能力（造形能力・美的能力）」が生来（天賦）のものかについての発問
- イ. 絵を描く能力は生まれつきのものだと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. デザインのセンスは生まれつきのものだと思う。（はい、いいえ）
 - ハ. 立体を造形する能力は生まれつきのものだと思う。（はい、いいえ）
- b. 学習による美術の能力・センスの伸長の可能性についての発問
- イ. 絵を描く能力は学習によって伸びるものと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. デザインのセンスは学習によって伸びるものと思う。（はい、いいえ）
 - ハ. 立体を造形する能力は学習によって伸びるものと思う。（はい、いいえ）
- c. 「良い作品」の基準や評価についての発問
- c-1. 大衆受けする作品と「良い作品」の関係。
- イ. 皆の支持がある作品が良い作品だと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. 皆の支持が得られない作品が悪い作品とは限らないと思う。（はい、いいえ）
- c-2. 写真のような再現性と「良い作品」の条件。
- イ. 写真のように描かれ（作られ）た作品が良い作品だと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. 写真のように描かれ（作られ）ていない作品が悪い作品だと思わない。（はい、いいえ）
- c-3. 個人の好悪（趣味・趣向）と「良い作品」の条件との関係。
- イ. 自分が良いと思った作品が良い作品だと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. 自分が良いと思わない作品が悪い作品とは限らないと思う。（はい、いいえ）
- c-4. 時代への適応性と「良い作品」の条件との関係。
- イ. 時代にあった作品が良い作品だと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. 時代に合わない作品が悪い作品とは限らないと思う。（はい、いいえ）
- c-5. 狭義の美の具現は「良い作品」の条件になり得るか。
- イ. 美しい作品が良い作品だと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. 美しくない作品が悪い作品とは限らないと思う。（はい、いいえ）
- c-6. 快と不快の感情は「良い作品」の条件になり得るか。
- イ. 見た人が心地よくなる作品が良い作品だと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. 見た人が心地よくなれない作品が悪い作品とは限らないと思う。（はい、いいえ）
- d. 美術の評価についての発問。
- イ. 美術の評価は必要だと思う。（はい、いいえ）
 - ロ. 美術の評価は芸術的才能についてなされるべきである。（はい、いいえ）
- e. 記述での回答を求める発問。
- イ. あなたにとって絵画・デザイン・立体の良い作品とはどのようなものをいうのか。
 - ロ. 良い作品表現とはどのようなものをいうのですか。

- ハ. 上手い表現とはどのようなものをいうのですか。
ニ. あなたが初めて絵を描いたのは何歳位ですか。
ホ. 普段何かを描いたり作ったり、表現することがありますか。
ヘ. 絵画・デザイン・彫刻等で好きな作品はありますか。作品名か作者名で答えて下さい。

美術・デザインの表現・鑑賞の美的能力・センスは、学ぶ主体の生徒たち個々の学習を支援する側（教師）の教材の工夫や授業法の改善によって、あるいは、子どもたちの学習や努力によって開発され、向上するであろう。そうでなければ論理上、学校教育で教科の一つに美術教科を据える必要も意義も無い。美術教育者は、自分の成長過程での美的能力の獲得経験や教師、指導者から得た知識や技法、薫陶を記憶している筈である。（ただし、教師との折り合いが悪くとも美術家として大成する例外もある。）

普通教育に関しては、教育もしくは授業は教師、子ども、教材の三者の相互関係によって成立することから、美術教育もまた一者が欠けてもそれは最早、成立しない。しかし、仮に教材の意義を強く意識しない授業があったとしても、教材と個々の生徒の発達や個性との関係に対する問題意識や、課題設定、概念規定を教師が厳密に意識しなくとも、たとえば授業の「作業」工程や授業目標が生徒に具体的に示されれば、美術の授業は、一見授業らしく成立する。

また、自己の学習活動と教材との関係に子どもたちが気づき、すぐれた教材を自分で発見・開発し、教師の支援を不要とした場合は、子どもたちの「天賦の才」や「自己学習能力」、「課題設定能力」、「課題探求能力」、「子どもたち相互の教育力」等による「独学」と云うのが相応しい。放任でない限り、子どもたちが自ら学び、相互に学び合い、自ら実践すること自体は現在の教育課程でむしろ強調されており否定されるべきではない。教科書や学校の設定する単元以外に自然環境や地域文化、伝統の文化財、「千と千尋」等のアニメーションのサブカルチャー作品等から子どもたちが学ぶことも大きく、機会も多いであろう。また、仮に逆に教師と教材が強調され過ぎた場合は、子どもと云う学びの主体性は無視・軽視され、教師の独断場に教室での授業が化してしまうであろう。

先の教師、子ども、教材の三者のどれかが主体の重点を担うかで教育や授業の様相は様々に変わり得るであろう。「美術教科不要論」があるとするればその理由に、普通教育に美術の「天才教育」は不要であるとする誤解や教育・学習の眼にみえる著しい効果が学校での美術教育には期待できない等とする誤解に基づくのであろう。

美術教科に関わる教員や美術教育実践に携わる人の多くは、学校の教育環境が整備され、各生徒の個性や適性、能力に応じた支援方法・教授法が教師によって工夫され、教材が開発されれば、生徒の美的感性の発達と表現能力の発達が人格形成とともに保障され、美的能力は向上するであろうと考えている。従って、根本的には、美術を通してのエデュケーション、'Education through Art' (H. Read『芸術による教育』)や美術による人間形成 (Löwenfeld) を目指すのであってみれば、巧緻性や技巧の習熟、上手い、下手だは付随的なものであろう。

しかし、美術教育における教育・学習実践の効果について、学習の主体者である今の生徒は考えているであろうか。もし、仮に教育や学習や努力によっても美的能力やセンスが開発もさせれず、向上もしないとするれば、美術・デザインの教科は不要である。しかし、大半はそのように子どもたちも考えている筈はないと推測する。むしろ、なぜ美術教育が必要なのか、子どもたちがその理由をどのように考えているのかの方が重要である。美術・デザインの表現と鑑賞の学習で子どもたちが獲得することやもの、美的能力の発達とは何なのであろうか。このような、中学生、大学生に対する美術教科の

学習意義についての今回の意識アンケートはこれらのことの入り口の一部を明らかにすると期待した。

設問の中には美術教育上のタイプ論に関わる難問も含まれている。例えば、視覚型・触覚型・中間型等の、あるいは内向型・外向型と直観型・視覚型・思考型・感情型の組合せ等によって先天的に持っている例えば彫刻表現の適性を持つ生徒が、ある年齢になってその彫刻への適性を顕現化し、絵画制作では写實的再現表現よりも触覚的な表現主義的表現を好むケースも多い。従って、天性の適性が誰にも平等にあるのではなく、向き・不向き、得意・不得意がどの子ども、個人にもあることを認めざるを得ない。a.「美術の能力（造形能力・美的能力）」が生来（天賦）のものかについての発問のイ、ロ、ハの模範回答のいずれも「どちらとも言えない」となるのである。bの発問のイ、ロ、ハの模範回答も同様である。しかし、中学生、大学生にその回答を期待するのは無理である。

(2)中学校美術教科の学習意義についての意識アンケート（対象は中学生と少数の大学生）の集計結果と調査結果所見について

以下は、北上中学校中学生：1年58名（欠席4名）、2年54名（欠席1名）、3年61名（欠席5名）、岩手大学生芸術文化課程造形コース美術選修1年生23名のアンケート集計結果と生徒、学生のコメント例である。少数点は第2位以下を四捨五入した。（中1年は中学1年生、大1年は大学1年生の意味である。）

a.「美術の能力（造形能力・美的能力）」が生来（天賦）のものかについての発問

イ. 絵を描く能力は生まれつきのものだと思う。

中1年 はい 36.2%，いいえ 63.8%

中2年 はい 50.0%，いいえ 50.0%

中3年 はい 45.9%，いいえ 54.1%

平均 はい 44.0%，いいえ 56.0%

大1年 はい 47.8%，いいえ 26.1%，どちらとも言えない 26.1%

・[はい]

中1年：「絵が上手い人は小さい頃から上手いと思うから」、「下手な人と上手い人がいるから」、「生まれつき持って生まれた才能だから」

中2年：「生まれつき上手い人は練習しなくても上手いから」、「手先が器用とか遺伝とかもあるから」、「絵を描くのが好きだから」

中3年：「才能のある人は直感的に描けると思うから」、「その人の生れつきの才能というのがあると思うから」、「絵を描くのが急に上手くなったりしないから」

・[いいえ]

中1年：「練習すれば上手くなると思うから」、「それでは悲しいと思うから」、「人の能力はみんな同じで平等であると思うから」、「絵は人それぞれだから」

中2年：「学習していくうちに身につくものだったから」、「いつも絵を描いている人上手いと思う」、「小さいうちから描いていれば能力がつく」、「小学校低学年の絵は特に違いがないから」

中3年：「生まれつきより生まれてからの行動によると思うから」、「頑張り次第だと思うから」、「生

まれ育った環境のせいだと思う」

大1年：

・[はい]

「生れつき持っているのは、物事をよく見たり、描くことが好きだったりする能力であって、必ずしも上手く描ける能力ではない。よく見て好きだからこそ、上達が早く上手くなっていくのだと思う」、
「親が美術の才能があると、子もあることが多いと思う」、「才能とは言わないけど、絵を描きたいと思う時点で絵に対する執着が能力化すると思う」、「それ以外の何だっていうんですか」

・[いいえ]

「絵を描く能力=技術。絵を描く能力≠センスだとすると、絵はすべての人に生み出せるものだ」

・「どちらともいえない。」

「能力は何かをきっかけに開花されるものだと感じるから」

ロ. デザインのセンスは生まれつきのものだと思う。(はい, いいえ)

中1年 はい 36.2%, いいえ 63.8%

中2年 はい 61.1%, いいえ 37.0%

中3年 はい 55.7%, いいえ 44.3%

平均 はい 51.0%, いいえ 48.4%

大1年 はい 26.1%, いいえ 26.1%, どちらとも言えない 47.8%

・[はい]

中1年：「人に描いてもらった時にかわいいものを描く人とそうでない人がいるから」、「もともとそうだから」、「創造力がある人とそうじゃない人が居るから」、「センスは生まれつきのものだと思うから」

中2年：「生まれた時からセンスが異なるから」、「人には人と違う能力がそれぞれあるから」、「あまり上手くなった人を見たことがないから」

中3年：「上手い人と下手な人がいる」、「発想できるかできないかによると思うから」、「デザインのセンスは生まれつき持っている人のほうが多いと思うから」

・[いいえ]

中1年：「努力や才能で上手くなると思うから」、「色々なことを経験してできると思うから」、「想像力が豊かな人がセンスがよいと思うから」、「その人がセンスがいいか悪いかで決まると思うから」

中2年：「学習次第だと思う」、「色々なものをみてセンスが良くなっていくと思うから」、「勉強すればデザインのセンスはできると思うから」

中3年：「いろいろな資料を参考にしたりしてデザインすればセンスは関係無いから」。「学習して見付けるものだと思うから」、「教育や身のまわりのものが関係すると思うから」

大1年：

・[はい]

「学習によって技術は伸びる。それによってセンスも伸びるかと思うとそれは別」、「デザインはあんまり人の内面とカンケイない気がするから。感性を伸ばしていくことで、センスがあがるのではない気がする…。」

・[いいえ]

「何を見てきたか、とか、遊び心を見つけてる人」

・[どちらともいえない]

「どれだけ多くのデザインを見てきたかによって違うと思う」、「これは自分が生活していく中で、育てられるものだから」、「環境も大きい」、「『センス』はやはり、生まれつきもあるし、その人が育ってきた環境や経験にもよるものであると思うから」

ハ. 立体を造形する能力は生まれつきのものだと思う。(はい、いいえ)

中1年 はい 36.2%, いいえ 63.8%

中2年 はい 48.1%, いいえ 51.9%

中3年 はい 49.2%, いいえ 50.8%

平均 はい 44.5%, いいえ 55.5%

大1年 はい 39.1%, いいえ 21.7%, どちらとも言えない 26.7%

・[はい]

中1年:「想像力がゆたかな人はそうだと思うから」、「人それぞれだと思うから」

中2年:「作るのが上手い人は小さい頃から上手だから」、「発想力が豊かな人が立体を上手につくれると思う」

中3年:「上手い人と下手な人がいる」、「どう感じるかは人によって違うと思うから」、「上手に作れる人は決まっているから」

・[いいえ]

中1年:「不器用な人が器用になれるのだったら、頑張れば伸びる」、「頭を柔らかくすればできるようになると思うから」、「小さい頃にいろいろなことをすれば変わると思うから」

中2年:「努力次第で能力は伸びると思うから」、「創造力は生まれつきのものだと思うから」

中3年:「きっと能力がつくまでには一杯学習したと思うから」、「やる気の問題だと思うから」、「頑張れば力が伸びると思うから」

大1年:

・[はい]

いずれもノー・コメント

・[いいえ]

「絵、デザインと共通して、能力やセンスは生きている中で成長するものである。よって“生まれつき”ではないと考える」、「訓練によるところが大きいと思う」、「よく観察したり考えたりしてたり」

・[どちらとも言えない]

「経験ではないだろうか?でも初めて造形をしてすばらしいものをつくれる人もいるだろうし、どちらとも言えないと思う」、「生きているうちにそなわってくるものと両方」、「どちらとも言えないが、立体とかは勉強したり練習したりでくりかえすことにより身につけられる、創造できるものだと思うから」、「感性を磨くのは、能力とはカンケイないと思う」、「これは何に対しての能力か分からない」

b. 学習による美術の能力・センスの伸長の可能性についての発問

イ. 絵を描く能力は学習によって伸びるものと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	79.3%	いいえ	20.7%		
中2年	はい	87.9%	いいえ	12.1%		
中3年	はい	93.4%	いいえ	6.6%		
平均	はい	86.9%	いいえ	13.1%		
大1年	はい	91.3%	いいえ	0%	どちらとも言えない	8.7%

・[はい]

中1年：「学習に限らず家で沢山絵を描いている人は伸びると思う」、「練習すれば伸びる」

中2年：「いろいろ見て学習すれば伸びると思うから」、「技術を学べばなんとかなると思うから」

中3年：「新しい技術を身につければできる」、「上達していったり上手くなる」。「描いているうちにより良い表現になると思うから」

・[いいえ]

中1年：「自分はいくら絵を描いても上手くならなかったから」

中2年：「能力は生まれつきだと思う」

中3年：「生まれつきだとおもうから」

大1年：

・[はい]

「テクニック、ものの見方を学ぶことで(模倣から始まり)絵を描く能力の伸長につなげられると思う」、「ある程度は。天賦の才の中には『努力できる』という才能もあると考えるので、その持ち主は他と差が付きまくるであろう」、「でも学習の仕方によって伸びたり伸びなかったり差が生まれる」、「『正確に見たまま描く』という点では伸びると思う」

・[いいえ]

なし(皆無)

・[どちらとも言えない]

「アカデミックな学習も少しは効果があるかもしれないが、感性を伸ばすのは学習によってではないと思う」

ロ. デザインのセンスは学習によって伸びるものと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	63.8%	いいえ	36.2%		
中2年	はい	70.4%	いいえ	29.6%		
中3年	はい	70.5%	いいえ	29.5%		
平均	はい	68.2%	いいえ	31.8%		
大1年	はい	69.6%	いいえ	8.7%	どちらとも言えない	21.7%

・[はい]

中1年：「色々な絵を見ていけばデザインセンスも伸びるのではないかと思う」、「努力でセンスはつくと思う」

中2年：「いろいろなものをみるとセンスがつくと思う」

中3年：「学習次第で伸びると思う」，「環境が良ければ（学習できる環境であれば）センスが良くなると思うから

・[いいえ]

中1年：「そう簡単にはいかないと思う」，「生まれつきなので無理だと思う」

中2年：「デザインセンスはその人のセンスだと思うから」

中3年：「センスばかりは生まれもってのものだと思うから学習では伸びないと思う」

大1年：

・[はい]

「あくまで，一般的な定義や技術の面で，絵，立体と同じく学習で伸びると思う」

・[いいえ]

「センスは生まれつきではないが，他の分野と違って，その人の生活，経験，環境で育っていくので学習では伸びないと思う」

・[どちらとも言えない]

「センスは生まれつきではないが，学習以外に鑑賞，遊び心も必要」

ハ．立体を造形する能力は学習によって伸びるものと思う。(はい，いいえ)

中1年 はい 81.0%，いいえ 19.0%

中2年 はい 83.3%，いいえ 14.8%，無回答 1.9%

中3年 はい 70.5%，いいえ 29.5%

平均 はい 78.3%，いいえ 21.1%

大1年 はい 87.0%，いいえ 0%，どちらとも言えない 13.0%

・[はい]

中1年：「頑張って練習すれば下手な人も上手くなると思う」，「レオナルド・ダ・ヴィンチも練習していたから」，「数学などで立体を描いているから伸びる場合もあると思うから」

中2年：「体験の積み重ねだから」，「勉強したことを忘れないでちゃんと生かすことができれば」，「色々見て真似をすれば伸びると思う」

中3年：「新しい技術を身につければできる」，「上達していったら上手くなる」，「よく分からないが伸びると思う」

・[いいえ]

中1年：「ある程度は決まってしまうと思う」

中2年：「創造力は生まれつきだから」

中3年：「よくものを見れないと作れないと思う（人物とか。抽象は別だけど）」

大1年：

・[はい]

「学習しようという気持ちがあればいいかも」，「学習や人体の研究によって，体の仕組みを知ったり，立体を造形する上での知識を得ることができると思う」，「技術を学ぶことで伸びると思う」，「数をこなしていけば少しずつでも伸びるはず」，「見たものをそのまま形にする」という点では伸びると思う」

・[いいえ]

なし (皆無)

・ [どちらとも言えない]

「表現するために、ある程度技術も必要だとは思うけど、いかに感性を伸ばしていくかは学習によってではないと思う」、「これは能力さるなしに関係なく、立体を造形することは生まれつき、必然だと思う」

c. 「良い作品」の基準や評価についての発問

c-1. 大衆受けする作品と「良い作品」の関係。

イ. 皆の支持がある作品が良い作品だと思う。(はい, いいえ)

中1年 はい 46.6%, いいえ 53.4%

中2年 はい 27.8%, いいえ 68.5%, 無回答 3.7%

中3年 はい 19.7%, いいえ 80.3%

平均 はい 31.4%, いいえ 67.4%

大1年 はい 17.4%, いいえ 60.9%, どちらとも言えない 21.7%

・ [はい]

中1年: 「一人だけいいとおもっても、みんなにいいといわれなきゃだめ」、「専門家がいいというといい作品だと思う」

中2年: 「有名な人が支持すれば良い作品になる」、「自分でいやでも周りの人が違うことがあると思うから」

中3年: 「皆がいいと思えばいい作品だと認められるから」

・ [いいえ]

中1年: 「そういう考えで作品をつくるのは何だか違う気がする」、「一人でもいいといってくれるひとがいればいいから」、「他の人に悪く言われても自分がいいと思って作った作品がいいと思うから」、「みんなに知られていない作品でもいい作品はあると思う」

中2年: 「自分がよいと思ったらそれでいいと思う」、「作品に対しての感じかたは人それぞれだから」、「みんなにその作品のよさがわからないかもしれないから」

中3年: 「支持されなくても心が癒されることはある」、「評価を気にするのは変だと思うから」、「支持されなくても良い作品はあると思うから」、「自分がいい作品だと思えばそれでいい」

大1年:

・ [はい]

「支持する人が素直な気持ちであれば」

・ [いいえ]

「商品としてなら別だけど、というか、いいも悪いも無いです」、「皆といっても、ものの見方が相対的で、価値なんてつけれない」

・ [どちらとも言えない]

「自分の内面を見つめて作ったものは、まず、自分が支持することが大事だと思うから」

以下、コメントを省略して、集計を記す。

ロ. 皆の支持が得られない作品が悪い作品とは限らないと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	87.9%	いいえ	10.4%	無回答	1.7%
中2年	はい	96.2%	いいえ	1.9%	無回答	1.9%
中3年	はい	91.8%	いいえ	6.6%	無回答	1.6%
平均	はい	92.0%	いいえ	6.3%		
大1年	はい	95.7%	いいえ	0%	どちらとも言えない	4.3%

c-2. 写真のような再現性と「良い作品」の条件か。

イ. 写真のように描かれ(作られ)た作品が良い作品だと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	17.2%	いいえ	81.1%	無回答	1.7%
中2年	はい	16.2%	いいえ	79.6%	無回答	3.7%
中3年	はい	13.1%	いいえ	86.9%		
平均	はい	15.5%	いいえ	82.5%		
大1年	はい	0%	いいえ	60.9%	どちらとも言えない	39.1%

ロ. 写真のように描かれ(作られ)ていない作品が悪い作品だと思わない。(はい, いいえ)

中1年	はい	93.1%	いいえ	5.2%	無回答	1.7%
中2年	はい	92.6%	いいえ	7.4%		
中3年	はい	91.8%	いいえ	4.9%	無回答	3.3%
平均	はい	92.5%	いいえ	5.8%		
大1年	はい	91.3%	いいえ	0%	どちらとも言えない	8.7%

c-3. 個人の好悪(趣向・嗜好)と「良い作品」の条件との関係。

イ. 自分が良いと思った作品が良い作品だと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	51.7%	いいえ	48.3%		
中2年	はい	62.9%	いいえ	37.1%		
中3年	はい	68.9%	いいえ	31.1%		
平均	はい	61.2%	いいえ	38.8%		
大1年	はい	39.1%	いいえ	17.4%	どちらとも言えない	43.5%

ロ. 自分が良いと思わない作品が悪い作品とは限らないと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	84.5%	いいえ	15.5%		
中2年	はい	87.0%	いいえ	11.1%	無回答	1.9%
中3年	はい	85.2%	いいえ	14.8%		
平均	はい	85.6%	いいえ	13.8%		
大1年	はい	69.6%	いいえ	4.3%	どちらとも言えない	26.1%

c-4. 時代への適応性と「良い作品」の条件との関係。

イ. 時代にあった作品が良い作品だと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	12.5%	いいえ	87.5%		
中2年	はい	11.1%	いいえ	88.9%		
中3年	はい	14.8%	いいえ	83.6%	無回答	1.6%
平均	はい	13.1%	いいえ	86.7%		
大1年	はい	4.3%	いいえ	56.5%	どちらとも言えない	39.1%

ロ. 時代に合わない作品が悪い作品とは限らないと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	91.4%	いいえ	8.6%		
中2年	はい	92.6%	いいえ	5.5%	無回答	1.9%
中3年	はい	90.2%	いいえ	8.2%	無回答	1.6%
平均	はい	91.4%	いいえ	7.4%		
大1年	はい	95.7%	いいえ	0%	どちらとも言えない	4.3%

c-5. 狭義の美の具現は「良い作品」の条件になり得るか。

イ. 美しい作品が良い作品だと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	36.2%	いいえ	63.8%		
中2年	はい	27.8%	いいえ	68.5%	無回答	3.7%
中3年	はい	24.6%	いいえ	72.1%	無回答	3.3%
平均	はい	29.5%	いいえ	68.1%		
大1年	はい	8.7%	いいえ	43.5%	どちらとも言えない	47.8%

ロ. 美しくない作品が悪い作品とは限らないと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	87.9%	いいえ	10.4%		
中2年	はい	88.9%	いいえ	11.1%	無回答	1.7%
中3年	はい	90.2%	いいえ	9.8%		
平均	はい	89.0%	いいえ	10.8%		
大1年	はい	87.0%	いいえ	4.3%	どちらとも言えない	8.7%

c-6. 快と不快の感情は「良い作品」の条件になり得るか。

イ. 見た人が心地よくなれる作品が良い作品だと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	74.1%	いいえ	22.5%	無回答	3.4%
中2年	はい	77.8%	いいえ	22.2%		
中3年	はい	77.0%	いいえ	21.4%	無回答	1.6%
平均	はい	76.3%	いいえ	22.0%		
大1年	はい	17.4%	いいえ	30.4%	どちらとも言えない	52.2%

ロ. 見た人が心地よくなれない作品が悪い作品とは限らないと思う。(はい, いいえ)

中1年	はい	69.0%	いいえ	27.6%	無回答	3.4%
中2年	はい	81.5%	いいえ	16.6%	無回答	1.9%
中3年	はい	70.5%	いいえ	29.5%	無回答	1.6%

平均 はい 73.7%, いいえ 24.6%, 無回答 2.3%
 大1年 はい 100.0%, いいえ 0%, どちらとも言えない 21.7%

d. 美術の評価についての発問。

イ. 美術の評価は必要だと思う。(はい, いいえ)

中1年 はい 67.2%, いいえ 31.1%, 無回答 1.7%
 中2年 はい 53.7%, いいえ 44.4%, 無回答 1.9%
 中3年 はい 47.6%, いいえ 47.5%, 無回答 4.9%
 平均 はい 56.2%, いいえ 41.0%, 無回答 2.8%
 大1年 はい 47.9%, いいえ 13.0%, どちらとも言えない 39.1%

ロ. 美術の評価は芸術的才能についてなされるべきである。(はい, いいえ)

中1年 はい 44.8%, いいえ 53.5%, 無回答 1.7%
 中2年 はい 46.3%, いいえ 50.0%, 無回答 3.7%
 中3年 はい 19.7%, いいえ 72.1%, 無回答 8.2%
 平均 はい 36.9%, いいえ 58.5%, 無回答 4.5%
 大1年 はい 8.7%, いいえ 26.7%, どちらとも言えない 47.8%, 無回答 4.3%

2. 中学生での調査結果の所見 (齋藤)

二者択一の質問での中学生での回答の集計および生徒のコメントを分析すると、主として以下のことが明らかになった。

(1) 絵を描く能力と学習

絵を描く能力は生まれつきであると考えている生徒が多い。学年2年生は半数である。生徒の中で「あの人は生まれつきうまいから」と云う表現がよく使われ、先天的な能力として、美術の能力を捉える傾向がある。そのように家庭で言われて育ってきた可能性も考えられるし、「親も絵が駄目だから」などと、遺伝するような性質として捉えることがある。また、「環境によって変わる」という認識をもっている生徒が多い。回数を重ねて練習し、慣れていくうちに上達すると考えている。

答えた生徒は、自分もそのようにして回数を重ね、ある程度表現できるようになったとう自覚があると考えられる。

絵を学習すれば、努力次第で絵の能力は伸びると考えている生徒は学年が上がるにつれて増える傾向がある。3年生は90%以上である。上達するスキルを学び、習得すれば能力は伸びると考えている生徒が多い。生れつきの能力だと考えている生徒の数と合わないのは、素質の有無を前提にしているからであろう。

(2) デザインのセンスと学習

2年生は、60%以上がデザインのセンスは生まれつきであると考えている。絵画や立体と違って、デザインセンスばかりは、学習してもどうにもならないと考えている生徒が意外に多い。中学校の中で、服装などでデザインセンスを発揮する場は少ないが、限られた規則の中で自己表現しようとしている。生徒同士が「センスのいい人と悪い人」と分けて考えている傾向がある。中学生の「センスのいい」とは流行に敏感であることを指している。一方、育った環境や学習の試行錯誤によってセンスが

磨かれ、デザイン作品に表れると考えている生徒も多い。

デザインセンスは、学習で伸びないと考えている生徒は、絵画、立体作品について学習で能力が伸びると考えている生徒より多い。先天的なものを捉えている生徒が多い。

(3)立体を造形する能力と学習

立体を造形する能力は努力次第でなんとかなるという考えは半数以上である。立体造形に関しては手先の器用さや技能に長けていなければいけないという認識がある。「不器用」であると捉えている生徒が多い。また、立体を造形するには「創造力」が必要で、もともと備わっているものだと考えている生徒が多い。

どの学年も80%以上は立体を造形する能力は学習によって伸びると認識している。技術を学習することで上達すると考えている生徒が多い。

(4)良い作品の条件、良い作品と流行・狭義の美・写真的再現性・快・巧拙との関係

1学年に比べ、3学年は支持されなくても良い作品は良いという傾向が強い。1学年はまだ「皆の中の自分の作品がどのような位置付けか」ということにこだわる傾向があるといえる。3学年は、「自分の表現したいものを表現することが大切である」と捉えている。生徒は「有名人や美術の専門家によって認められたものが価値がある作品である」と思い、大衆の支持するものとは異なっても当たり前という意識もある。また、皆に支持されることが良い作品となって残るという考えを持つ生徒もいる。「見る基準はそれぞれで分からないし、不透明だと思うから、自分が良いと思う作品が良い作品である」と考える生徒が多い。

作品に一定の流行があるものの、時代の流行に乗る作品は、流行のはやり廃れによって消えて行く傾向にあると認識しておける生徒が多い。昔の絵画作品などについて、良いものは何時までも良いと考えている生徒が全学年を通して多数居ることが分かった。

「美しい印象を残さない作品でも良い作品である場合がある」ことを理解している生徒が多い。「綺麗だけでは良い作品とは言えないのでは？」と突っ込んで考えられる生徒が意外に多い。

中学校の中学年以上は写實的に描きたい願望が強まる時期であると言えるが、一時流行した写真のようなスーパーリアリズム的作品が良い作品とイコールではないと考える生徒が多数を占めた。スーパーリアリズム的作品には驚き、感心を示すものの、「所詮写し描き？」「ただの真似では？」という厳しい見方をしている生徒もいる。模写とは分けて考えているようである。

見て心地良いというのが良い作品の大きな要素のようである。しかし、少数であるが、心地良いばかりが良い作品の要素ではないと考える生徒もいた。

良い表現と上手い表現は同じではないと半数以上の生徒は捉えている。「上手い作品は技巧的にすぐれており、良い作品には心情的に共感できる」という捉え方をしているようである。この項目については他の項目よりも無回答も多い。どうしようと悩んだ様子が見られた。

(5)美術の評価の必要性

美術の評価の必要性については、よく分からないが評価が無いと先生が困るかも知れないと考えてるらしい生徒が多い。評価を自分の基準にするためと考えている生徒や、評価はより上達するために励みになる、成績付けのため必要だと考える生徒が多い。ただ、その成績が何のために必要かということになると、高校入試で必要だからという考えで行き止まる。芸術的才能で評価すべきではないとする傾向は1、2年では半数を少し上回るが、3年次は入試に関わって72%以上である。

3. 大学1年生での調査結果の所見と全体のまとめ(種倉)

大学1年生での回答の集計および生徒のコメントを分析すると、主として以下のことが明らかになった。

(1)絵を描く能力と学習

回答を三者択一とし「どちらともいえない」という項目を設定したために、パーセンテージ的な中学生との比較が単純には行かないが、絵を描く能力が「生来のもの」(先天的、天賦の才能か)という設問に対して「いいえ」が少ない。「はい」は中学生とほぼ同じである。

高校から大学入学1年次までの絵画制作や大学実技科目の受験準備の速修的な学習経験では、絵を描く能力について「生来の才能?いいえ、努力だ」と断定できる自信は、まだ、弱いであろう。努力によって、ある程度、描画技術は向上するが、それを「絵を描く能力」とは単純には認めない傾向も授業態度に見られる。自分の今後の芸術上の才能の開花について、学習への期待と不安を持っていると見たい。

(2)デザインのセンスと学習

デザインセンスを「生来のもの」とする人数と、「後天的」とする人数が4分の1強ずついる。「どちらともいえない」は内容的には「どちらともいえる」を含んで半数弱ではあるが多数派を占める。

「生来のもの」とするコメントの一つは、「デザインの技術は研鑽によって伸ばすことはできる。しかし、デザインセンスは(研鑽によっても)伸びない」とする回答である。また、「絵は人の内面と関係があり感性を伸ばせばセンスや能力を伸ばすことができるが、デザインは人の内面と関係がないから感性を伸ばしてもセンスや能力を伸ばすことができない」と云うような回答がある。ともに、デザインでは、技術とセンスは共存していないとする考えである。こうした考えに基づけば、色と形(色彩と形態)の基礎練習等で抽象絵画的に色面構成デザインを授業としたとしてもデザイン作品はクールなものとなるため人の内面と関わることはないであろう。

デザインや構成はクールなものであると思っている学生が一定数居ることには、指導上留意しておかざるを得ない。

(3)立体を造形する能力と学習

ある程度学習や教育によって技術の向上を期待出来るが、写実的なものは自ら学習でき、人体構造等は習わなければ伸びないことがわかっている。絵画、彫塑は習うことによって能力が伸びる、また、環境や感性を磨くことも大切であると学生は考えている。天賦の才能で学習しても意味が無いと考える学生は皆無であった。

(4)美術の評価の必要性和芸術的才能

専門的に美術を評価する人の場合と専門的に学ぼうと思っていない人の場合は評価基準を違えるべきとするコメントがある。才能や適性のみを評価せず、適性に即した努力の軌跡を多元的な評価軸(独創性、技術力、巧緻性、材質・色彩・形態等の構成能力、造形性、直観力、訴求力、伝達性、視覚性・触覚性等)で多面的に評価し、個々の生徒たちの美的能力の発達を保障するためにいわゆる「形成的評価」することが学校教育の中での美術科の評価の在り方であろう。

まとめ

アンケートを通して、表現したいこと、観察して作り描くこと、鑑賞することが相互に生徒・学生個人の制作活動に関わることが改めて認識できた。集団的な相互の教育力も時に必要であるが、学校教育のみでなく感性やセンスを磨く自己教育力も美術・デザイン活動には重要だと生徒・学生は考えている。

中学生は、大学生と比べ、学習や教育による技術的な向上と感性の拓磨の効果があることを半ば信じつつも、生まれつきの才能は変えようがないという純真さを持ち合わせていることが分かった。自己の適性に気付きながらも、苦手な分野を諦めず、得意な分野に高慢にならず、才能の有無に固執せず、教師の支援を得て、本人の努力と学習によって適性、才能、感性、技術等の要素が造形活動の能力を伸ばすことに気付かせることが重要である。

評価基準については、学習指導要領に示された「関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現」、
「知識・理解」の4観点に基づく教育課程審議会の答申（平成12年12月）を受けて、中学校美術の「評価の観点」として「美術への関心・意欲・態度、発想や構想の能力、創造的な能力」が『評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）、評価基準、評価方法等の研究開発報告』（国立教育政策研究所教育課程研究センター）に掲げられている。観点別評価のためにそこに示された具体例も含めて重要であるが、評価以前に、先ず生徒・子どもたちに気付かせなければならぬことは、他教科と同様に美術や造形の表現・鑑賞能力が学習と努力によって獲得できること、また、基礎と応用・発展があることである。また、教師は生徒・子どもたちの個々の資質や発達の個別性を評価以前に把握しなければならないことは云うまでもない。